健康と光線

発行所
〒153－0063
東京都目黒区目黒
4－6－18
サナモア光線協会
年4回発行
会費年500円
電話 東京（03）
3793－5281
3712－5322

医療の根幹は自然治癒力にある

最近、人は自然に対し、実に不遜だとしばしば思います。生命を支える根幹は自然にあり、医療も自然に備わった治癒力に依存していることを何人も承知していながら、止まることなく自然を破壊し続け、医師の口から自然治癒力という言葉を聞くことは殆どありません。あたかも自然の尊厳を認めたくないかのようです。このような背景のもと、自然治癒力を軽んじ、ひたすら現代医学を信奉する傾向が強まる一方ですが、如何なる医療も自然治癒力なしでは成り立たないことを知らなければなりません。

医学の祖と崇められるヒポクラテスは、自然治癒力を体内に宿る名医に例え、「病は自然が治し、報酬は医者が貰う」、と喝破しましたが、自然治癒力を高める手段として日光浴を医療に応用しています。この日光浴の霊妙な作用を、何時でも、何処でも利用できるようにしたのがサナモア光線療法です。

サナモア光線協会は、現代医学の手法にサナモア光線療法を併用する利点、すなわち自然の摂理に則って健康を増進し自然治癒力を高める事実の啓蒙活動を通して、サナモア光線療法の普及に努めます。

信ずべきものは

自然は悠久であり、その恵みはあまねく及ぶのに対し、文明の産物くらいあやふやなものはありません。病気の治療法とて例外でなく、十九世紀に最も効果があると信じられたのは、もっぱら患者の血を抜きまくる（瀉血）療法だったのですが、死期を早めるだけのこんな滅茶苦茶な療法でも効果があると信じられたのは、自然治癒力の賜物です。

先頃、厚生省は成人病の予防には生活習慣を見直すことこそ肝要であり、生活習慣病と呼ぶことを提唱しました。これは早期に診断し、治療しても合併症を防げないことが明らかにされたためですが、現代医学の限界を如実に示しています。しかもアメリカのアルダーマンらは、生活習慣病の予防対策の中で重視されてきた減塩は生活習慣病による死亡率を高める、とこれまでの医学常識をくつがえす研究結果を報告しました。無論、この報告だけで減塩の正否の判断はできませんが、減塩が動脈硬化、虚血性心疾患、脳梗塞、ぼけ等の誘因になる可能性まで指摘されており、何を信ずべきか分からなくなります。

サナモア光線協会は、第一に信ずべきは自然の摂理であり、サナモア光線療法は自然の摂理に則って生命力のトータルバランスを保つとの信念に基づき活動します。

サナモア光線協会が目指す目標

—サナモア光線療法の認知と評価—

サナモア光線協会　サナモア中央診療所
医学博士　宇都宮　光明

とんでもない話

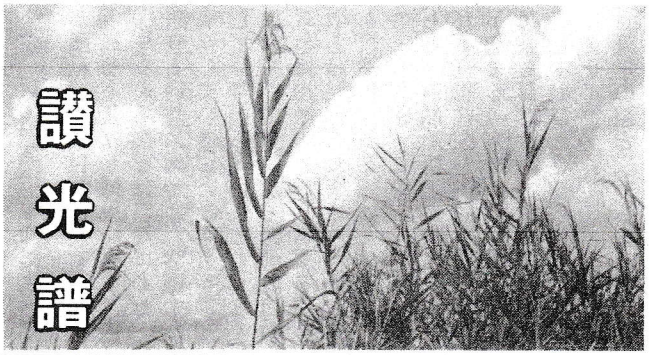
太陽光線は紫外線を含めあらゆる生物に欠かせません。しかるに紫外線による日焼けのような生理現象を大罪のごとく強調し、紫外線を避けないと大変なことになると言う話を聞かされます。このような脅しは自然の摂理に反し、健康を失うだけで得るものはありません。ましてや商品の宣伝に紫外線を悪用するのは、人を誤らせるものであり言語道断です。

生体には紫外線B（UVB）のDNA損傷を紫外線A（UVA）や可視光線で修復する光回復のように、人知の遠く及ばない修復機構が備わっているのです。

紫外線の話の中でも特にとんでもない話は、オゾン層を破壊した大罪は棚に上げ、日光浴は健康を増進し風邪を引かない、と言うのは昔の話で、今や紫外線は百害あって一利なく、あらゆる生物は紫外線の脅威にさらされていると脅すことです。その上、厚生省が母子手帳から日光浴を勧める文言を消したことに便乗して、新市場の乳児用サンスクリーンの売り込みに血眼になっていますが、母乳にビタミンDがないことは明白で、乳児の健全な発育に適度な日光浴をさせてビタミンDを補うことは絶対に必要なのです。

自然を語る時、必ず太陽の恵みと言う表現が使われますが、その中に紫外線の恵みもはいっています。紫外線はなくても良いものでなく、オゾン層が破壊されても必要なことは自明です。日本は太陽光線に恵まれた国ですから、サンスクリーンをべたべた塗りたくっても、結果的に紫外線の恩恵に浴せますが、よた話を真に受けて乳児を暗室に閉じ込め全く日光浴をさせなかったら、重症なクル病になり死は免れません。

サナモア光線協会は、太陽の恵みを伝えるサナモア光線療法が、広く認知され、評価されることを通して社会に貢献します。



「天高く馬肥ゆる」
宇都宮義真撮影

新時代の医療

宇都宮　義真

重点は予防医学

この頃（昭和二十八年頃）、ペニシリンのような新しい良い薬が出来る一方で、一般大衆の医学知識が向上した（？）こともあって、素人の患者が医者に、「先生、私にペニシリンを注射して下さい」と治療法を指示することさえあるようである。確かにこれまでの医学の主眼は伝染病のような急性の感染症や結核のような慢性の感染症であり、素人が抗生物質で何でも治ると過信したとしてもさほど不思議ではない。

確かに抗生物質の出現によって感染症の治療法は大きく様変わりしたが、感染症以外の疾患に用いられているあふれるほど沢山ある薬は、殆どが対症療法薬の類で、病気を治す力はない。そのため最近はむしろ予防医学の面に重点が注がれる傾向にある。つまりどうしたら病気にならずにすむかと言うことが一層大切になってきたのである。

予防に優る治療はない

病気の治療法がどんなに進歩しても、予防法に優るものはない。しかして治療法と予防法は別なのかと言うと決してそうではない。病気は当人の身体に備わった病気を予防する力が働いて治るのであり、治療する力と予防する力とは表裏一体のものである。つまり予防する力と治療する力は同じと考えて良い。

予防医学に基づく治療法に予防接種がある。予防接種は伝染病に感染するのを予防するために有効な免疫原を投与して、伝染病に対する免疫力、即ち治療する力を高めるのであるが、効果があるのは対象疾患のみである。また薬は病気の治療に汎用されているが、健康人が用いれば有害なだけで、あらゆる病気を予防する力のある予防薬はない。

つまるところあらゆる病気に有効な予防策があるとすれば、根本的に体質改善を図り、自然に備わっている病気を予防する力を強くするしかないのである。

サナモア光線療法の将来性

人間が生身である以上、どんな病気になるか分からない。昨日まで元気に働いていた人が、ふとしたことで病気になる。所詮、人間は病の器である。このように何時、何処で病気になるか分からないのに、病気の予防には無関心で治療は人任せにする人は、火の用心はせずに火事になれば消防署が火を消してくれると安心している人と同じで、決して美徳ではない。

さてサナモア光線療法は、太陽の恩沢の全てを含む綜合光線を人工的に放射する物理療法であるが、薬物による対症療法とは異なり、元来が体力の回復や増進を目標としており、自然に病苦を退けようとするものである。従って適応症は多く、危険な副作用は伴わないのが特徴であり、未経験者でも容易に使え、予防医学的効果がある。しかし外見は白く光っているだけで余りに平凡であり、未だ一般の太陽光線に対する認識が浅いこともあって、病気の予防法として、また治療法としての効果を疑問視する向きも少なくないが、これまでの光線に関する研究報告や全国のサナモア光線治療院での治病成績より見て、今後ますます発展することを確信している。

無言の家庭医

夜中に熱が出た、歯が痛くて眠れない、こんな経験は誰にでもある。そんな時、家で即座に治せたら鬼に金棒である。また皮膚病のように長く患っている病人は、医者にばかり頼らずに、家で自分で出来る治療をして、医者に協力すると治るのも早くなる。サナモア光線療法で身体に備わっている生理機能が活発に働くようになれば、あらゆる病苦は快方に向かうようになっているのである。

今やサナモア光線療法は家庭にも普及し、病気の予防、病人の体力増強、病後の回復等々に目覚ましい効果を上げている。とにかく応用範囲は数限りなく、サナモア光線療法は無言の家庭医と言うべきである。

「健康と光線」
昭和28年1月5日発行
―新時代の医療―
昭和41年1月5日発行
―治療と予防と健康法―
から要約した。

サナモアカウンセラー　サナモア光線治療師

募集についてのお知らせ

サナモア光線協会　医学博士
宇都宮　光明

サナモア光線協会の新たな事業

サナモア光線協会は、東京光線療法研究所を創設した宇都宮義真によって、サナモア光線療法の啓蒙、普及を目的に昭和七年に設立されました。爾来、サナモア光線療法は多くの理解者のご支援、ご協力を頂き、家庭では頼れるホームドクターのように、治療院では信頼される治療師のように、ご愛顧を賜り今日に至りました。お蔭様でいささかなりとも国民の保健、福祉に貢献し、社会的責務の一端をはたしたと自負しております。

さてサナモア光線協会は、サナモア光線療法の啓蒙、普及活動の一環として、「健康と光線」を季刊紙として発刊して参りましたが、新たにさらなる普及をはかるため、サナモア光線療法の愛用者であって普及活動にご協力いただける希望者を募集し、資格を認定する事業を始めます。

資格認定事業の大要

サナモア光線協会がサナモア光線療法の普及活動に携わる希望者を募るのは、光線療法の資格について法的な定めがなく、最高裁判所が昭和三十五年一月二十七日に下した、「法的な定めのない治療行為を業として営んでも、その行為が有害か無害かをはっきり調べずに処罰するのは、憲法第二十二条に国民の基本的人権として職業選択の自由を保証した規定に反する」と言う判例があるからです。すなわち有害の恐れのないサナモア光線療法のような治療法は職業選択の自由で認められているのです。

しかしサナモア光線協会がサナモア光線療法を副業として、あるいは専業として携わる希望者の資格を認定するからには、スペシャリストとしての適性が求められます。そのためサナモア光線協会は、サナモアカウンセラーとサナモア光線治療師を養成するカリキュラムに基づきそれぞれの資格を認定し、資格認定後も随時開催する研究会等を通して資質の向上を目指します。

サナモアカウンセラーの養成

サナモアカウンセラーは、サナモア光線協会が委嘱したサナモアカウンセラー養成講座講師の指導のもと、サナモア光線療法が健康増進、疾病予防、疾病治療に効果的に作用する原理を理解した上で、サナモア光線療法の啓蒙、普及活動に協力することを希望する者を対象に講座を随時開講し、修了者にはサナモア光線協会会長名でサナモアカウンセラーの資格を認定する認定証を授与します。

受講資格　サナモア光線療法を実際に体験した上で、サナモア光線療法の啓蒙、普及活動に参加を希望する者。

講座内容　基礎医学、関係法規、サナモア光線療法の理論と実技。十八時間。

特　典　実績に応じたさまざまな特典があります。

サナモア光線治療師の養成

サナモア光線治療師は、サナモア光線療法を実践する治療院の経営を希望する者を対象に、サナモア光線協会が委嘱したサナモア光線治療師養成講座講師の指導のもと、サナモア光線治療師養成講座を随時開講し、修了者にはサナモア光線協会会長名でサナモア光線治療師の資格を認定する認定証を授与します。なお光線治療院を開院する際は責任指導し、医師が医療相談に応じます。

受講資格　サナモア光線療法を実際に体験した上で、治療院の経営を希望する者。

講座内容　基礎医学、関係法規、サナモア光線療法の理論と実技。三十六時間。

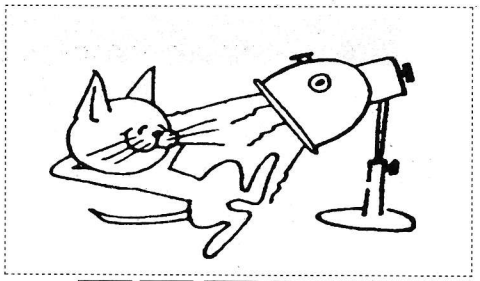
特　典　代理店資格の取得、サナモアの名称の使用を希望する者にはサナモア使用権許諾の契約書を締結した上で使用を許可します。

新たに企画した事業の成否

太陽光線の恵みは絶対です。しかしそれ自体、余りに日常的で慣れ過ぎているため、人間は感謝を忘れがちです。否、それどころかここ十年程前から、太陽光線から遠ざかった生活を強いられている人間だけは、太陽光線を浴びるのは危険であるかのごとき突飛な話が、科学の名のもと専門家と称する人の口を借りてまかり通っています。

しかしサナモア光線協会は、愚直と言われても人間もまた太陽光線の恵みで生かされている一生命体であるとの原点に立って活動します。無論、太陽光線の大恩を否定するような無責任な言動を認めることは出来ません。この協会の意図を理解し、新たに企画した事業を全国的に展開するには、サナモア光線療法愛用者のご支援、ご協力が欠かせません。旧に倍するご厚情をお願いする次第です。

なお東京での資格認定事業については、準備体制が整う来春まで暫時の間、サナモア中央診療所で研修を行う予定です。詳細については、㈱東京光線療法研究所内、サナモア光線協会事務局までお問い合わせ下さい。



治験例報告

☆慢性膀胱炎

症例　54歳　女性

症状　二年前、泌尿器科にて慢性膀胱炎と診断され、投薬を受け軽快した。以後、良好に経過していたが、約一年前から排尿時痛、頻尿などの自覚症状が出現し、次第に増悪したため近医を受診。再度、投薬されるも軽快せず、薬剤による消化器症状も認め悩んでいた際に、友人から光線療法を勧められ治療を希望し来所した。

療法経過　B、Dカーボンで下腹部20分、腰部20分、上腹部は一号集光器を用い10分、またABカーボンで足裏20分、膝部10分それぞれ照射した。翌日からは、友人に治療器を借りて自宅での治療を開始。一日二回の照射と、局部を一号集光器を使用して、BDカーボンで10分間追加照射すること、また、膀胱内の細菌を体外に排泄させることが重要なので、水分を十分に摂取するように指示した。四日目、排尿時痛はほぼ軽快したが、頻尿は続いているとの報告を受けたため、急性膀胱炎とは異なり、簡単には治らないから気長に構えて光線療法を続けることが大切と説明。十日目には、今まで絶えずあった下腹部の張るような不快感が消失。二週間後、夜間の頻尿が改善。一ヶ月後に来所された際には、気分は良好で排尿時痛や不快感は消失し、食欲も改善した。今後は再発を防ぐために、是非とも光線療法を続けたいと言っていた。

神戸市　ウエノ光線療研
上野　健太郎氏報告
TEL〇七八－三三二－一三五八

☆耳管狭窄症

症例　53歳　男性

症状　最近疲れ気味であったが、あくびをした際に突然、右耳がツーンとなり、耳がつまるような感じ(耳閉感)と難聴を自覚した。さらに、自分の声が大きく耳に響き(自声強調)、気分不快もあったため病院を受診したところ、耳管狭窄症と診断された。そこでは、ますます聴力が低下する可能性もあるので、すぐに治療を受けることを勧められたが、症例は長年のサナモア愛用者であり、光線治療で治したいと来所した。

療法経過　治療は、ABカーボンを用い、三灯あるいは四灯照射で行った。最初は側臥位にて、顔面と腰部および膝部に10分間照射し、次に後頭部と腹部および足裏に10分間照射した。さらに、今度は仰臥位をとらせ、一号集光器を用い、右耳と左側頚部(甲状腺左葉のあたり)に10分間の照射と、右側腹部と左膝部に10分間の同時照射を行った。その後、左耳と右側頚部(甲状腺右葉のあたり)、左側腹部と右膝部に10分間同時照射した。治療後、患者はまだ少し異和感は認めるが、気分は良好とのことであった。二日目は、さらに気分は良く、自声強調も軽くなり、夜間睡眠中に認めた鼻閉塞感も楽になってきた。三日目の朝食後に難聴は改善。その後、三日間の追加治療を行い、全治療六日間の治療を終了した。以後、一ヶ月間経過観察したが、経過は良好である。

川崎市　東京光線治療院
海渡　一二三氏報告
TEL〇四四－七二二－五〇六七

☆自己免疫性肝炎

症例　45歳　女性

症状　全身倦怠感を主訴に病院で検査したところ、自己免疫性肝炎の疑いと診断され入院治療を勧められた。症例は二十数年来のサナモア愛用者であり、入院手続きはとったが入院を待つ一ヶ月間で、少しでも自覚症状を改善させたいとの希望をもち来所した。

療法経過　AD、BD、DDカーボンの組み合わせで、前方、後方、側方の三方向から、肝臓をはさむように30分以上照射し、その後、一号集光器を用いて、前方から30分以上追加照射すること。基本照射として、足裏、足首、膝部、腰部、背部、腹部もAD、BD、DDカーボンで、各部に20分間照射することを指示した。一ヶ月後に、別の総合病院で検査した結果、脂肪肝と診断され、一年に一度の経過観察で良いと判断された。以後、光線療法を継続し、一年後の検査結果では完治していた。

福岡県春日市　育美健康光線療研
山崎　いく子氏報告
TEL　〇九二〈五八一－二〇三九
五七二－一五七三

サナモアカーボンの類似品にご注意下さい

サナモアA、B、C、Dカーボンは、その使用法を書いた著書「光線療法学」ともども愛用者各位の御信頼を頂き、全国津々浦々まで高い評価を受けておりますことは、皆様方よくご存知の通りであります。

ところが他社製カーボンに「光線療法学」をセットしたり、サナモアABCDと効果が同じという根も葉もないうたい文句で互換表を添付して販売している業者がいます。もとより、このような道理にもとる行為をする者が何時の世にもいますが、当研究所としては他社製カーボンを使用した場合の効果について一切の責任はもてませんので呉々もご注意下さい。

（サナモアカーボンには、製造元イビデン株式会社の商標－Bｉ－のマークが必ずついてます）

東京光線療法研究所

医療過誤を考える

サナモア光線協会
医学博士　宇都宮　正範

医療過誤の現状

今年一月に横浜市立大病院で起きた患者取り違え手術事故以来、医療事故は堰を切ったようにあふれ、今や病院に対する信頼度も地に落ちた感があります。

最高裁判所の調べでは、一年間に起こされる医療過誤訴訟は約六百件にものぼり、おおむね二千五百件が係争中だそうです。また、医療事故訴訟のための鑑定を行っている専門医グループ「医療事故調査会」によれば、九五年四月から今年三月までの四年間に、全国から三百四十五件の依頼があり、鑑定を終えた二百五十件のなかで百九十五件に医療過誤が認められ、うち百三十三件が死亡例であったこと、医療事故は、中小の病院より国公立病院や大学病院など高度医療機関で目立つことを報告しています。このなかで、過誤の原因は、診断の決めつけや救急処置の誤り、外科治療のミスなど「医療知識や技術の未熟さ、独善性」が百八十件で最も多く、医療従事者の質を向上させるシステムをすぐにでも作るべきと提言しています。

医療機関の不十分な対応

医療事故は、大きく医療ミスと医療過誤に分けられます。医療ミスとは、いわゆるヒューマン・エラーと呼ばれるもので、医学的介入の前に起こる錯誤で、薬・点滴の間違い、患者の取り違えなどが含まれますが、看護婦対患者の場面で起こることが多く、患者や家族が気付くケースがほとんどです。これに対し、医療過誤には、診断ミスや治療ミスなどが含まれ、医療知識や技術の未熟さが原因で引き起こされますが、医師の説明も難解で、分かりにくいことから、表面化することは少なく、病院側も極力認めません。

時には、医療事故が強く疑われる記事も目にしますが、その際の病院側の対応には疑問を感じます。病院側は、しばしば、患者に違う薬を投与したが、身体に悪影響はなく有効性も期待されると説明しますが、これでは、治療行為にはあまり差がないと言っているようなものです。投薬ミスを起こす前は、検討した結果、この抗生剤を選択し投与するという姿勢でいたはずが、投薬ミスを起こした途端、種類は違うけれど同じ抗生剤だから問題はないと態度を変えてしまうからです。また、誤った医療行為と患者の生命予後には因果関係を認めないと開き直るケースもありますが、こうなると医療のモラルはどこにいってしまったのでしょうか。もちろん、裁判になった時のことを考えれば、有利な状況にしておくため、安易に謝罪めいたことはしないほうが得策でしょうが、もう少し、患者や家族の気持ちに配慮した対応の仕方もあるのではないかと思います。

医療過誤を防ぐには

それでは、医療過誤は、医療従事者個人の質を向上させるだけで防げるのでしょうか。一人の患者が入院した場合、少なくとも十人前後の医師や看護婦と接することを考えると、個人の質の向上に頼るだけでは、医療過誤の発生は防ぎきれないような気がします。

米国の教育基幹病院では、一病床あたりの看護婦数は二人以上で、インターンを含めたレジデントも一病床あたり一人は配置されているため、ゆとりをもって一人の患者に接することができるシステムが整っています。これに対して、本邦の国立大学付属病院では、一病床あたりの看護婦数は〇・五人以下と非常に少ないため、一人の看護婦が多くの患者をかけ持ちするのが当り前です。なかには、夜勤が続いて体調をくずし集中力を欠いた看護婦もいるかもしれませんし、病棟で、二人の患者の容体が同時に急変したら、あっという間にマンパワーの不足に陥ります。また、医療の進歩は目覚ましく、検査内容や治療法が、年々複雑化、多様化していることも医療過誤の発生要因の一つになっています。

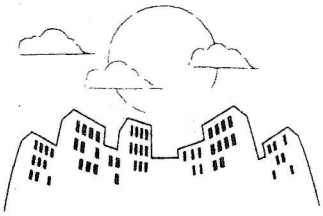
医療過誤や医療ミスの発生を防ぐためには、医療従事者一人一人が注意を怠らず、思い込みで行動せず、繰り返し確認することに違いありませんが、病院が主体となって、事故が発生しにくいシステムを整え、実現することも重要ではないかと思います。そして、被害者になる可能性のある患者自身が、厳しい目で医療行為を見つめ、医療従事者との間に、適度な緊張感を保つことも必要でしょう。

光線療法に過誤はない

今回は、医療過誤という病院医療の負の側面について触れましたが、時には病院で複雑な検査や治療を受けなければならない場合もあります。その際、病院医療には多くのメリットがある反面、常に薬の副作用や手術の後遺症、そして医療過誤などのデメリットがあることを忘れないで下さい。医療過誤はあってはなりませんが、残念ながら、今新聞で報道されている医療過誤は、ほんの氷山の一角に過ぎず、医療行為を今後も人間が行う以上、ミスを完全になくすことは不可能です。もしも、薬を使わず、手術もせずに、病気を治すことができる夢のような時代が到来すれば、医療過誤の心配はなくなることでしょう。それまでは、少しでも自分自身で健康を保持するように心掛けた方が良さそうです。本来、身体に備わっている自然治癒力をフルに活用して、病気の治療、健康増進をはかる光線療法には、決して過誤の心配はありませんから、その点安心してご利用下さい。

森羅万象

医学博士　宇都宮正範



ある日の新聞記事から

紫外線防止帽子

日差しの強さが気になる季節。環境問題と育児に関心を持つお母さんたちのグループ「エコママネット」が、幼い子供たちを紫外線から守ろうと、一風変わった帽子を考案した。その名も「紫外線防止帽子」。きっかけは、会員の友人が、通信販売で買った米国製の同じような帽子を子供にかぶらせていたことで、米国製の帽子を参考にデザインを考え、日よけ部分を左右の耳の部分と後ろの三つに分けた。日陰で遊ぶ時は、日よけをたくし上げ、頭頂部のボタンにとめれば、普通の野球帽と変わらない…。

園庭の日照権訴訟増加

「高層住宅が建つと園庭の日当たりが悪くなる」と建設差し止めを求める訴訟や仮処分申請をおこす幼稚園や保育園が、都市部で目立っている。庭の日照は建物への日照と違い、これまでは争点になりにくかったが、どの園も、「園児の健やかな成長に欠かせない」と主張している。地域の事情や被害の度合いによって異なるが、裁判所は、子供への影響を十分に考慮した上で判断するようだ。園側の主張の根拠は、「特に午前中の陽をふんだんに浴びることが、幼児の自律神経の発達などを促すうえで重要」（日本体育大の正木教授）などだ。園庭の日照をめぐる訴訟や仮処分申請が目立つのは、ここ数年だが、今後も増える傾向にある…。

□今の時代は、一方で、子供たちに日を当てないように血眼になっている母親がいると思えば、日照の確保に努力を惜しまない幼稚園や保育園があります。太陽は、人間が生まれるはるか昔から存在し、すべての生命の源です。太陽に素直に感謝し、太陽の恵みを皆で享受する時代が再び来ることを心から望みます。

目黒通信

★今年の夏は、思いのほか暑かった。その上、南洋のスコールのような豪雨に襲われ、被害も続出した。

★しかし今年は果物の色艶が良く、旨い。

★これは太陽の恵みの賜物である。

★太古から、人間も太陽の恵みを受けて達者になると信じてきた。

★しかるに最近、太陽の恵みは人間以外の生物には必要だが、人間にだけは害があると言う滑稽な話がある。

★この話には必ず商品がからんでいる。曰く、日焼け止めクリーム、紫外線防御作用のあるサングラス、ビタミンEやβ－カロチンやビタミンC等々である。

★こんな時世だからこそ、サナモア光線協会の使命は重いと受け止めたい。

サナモア
Sanamoa

サナモア光線協会
趣意書

サナモア光線協会は、太陽光線こそ健康を増進する自然の恵みの源泉であり、生命力を高めて病気の予防、治療に効果があるとの観点に立ち、太陽光線に近似したフルスペクトル光線を放射するサナモア光線療法の啓蒙、普及活動に努めることで、国民の健康、福祉に貢献します。

サナモア光線協会は、サナモア光線療法に対する認知と評価を高めるため、
一、季刊紙、「健康と光線」の発行。
二、サナモアカウンセラーの募集と育成。
三、サナモア光線治療師の募集と育成。
の事業を行います。

サナモア光線協会
医学博士　宇都宮　光明

「健康と光線」の購読者を募集します。
また事業の詳細はお問い合わせ下さい。
〒153-0063
東京都目黒区目黒4－6－18
サナモア光線協会 TEL (03) 三七九三－五二八一
三七一二－五三二二

（本紙の無断転用を禁止します。）